

國學院大學學術情報リポジトリ

ウチナーヤマトウグチの研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 座安, 浩史, Zayasu, Hirofumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002429

博士学位論文 要旨

座安 浩史

1. 論文名：「ウチナーヤマトゥグチの研究」

2. 論文構成

本論文は、以下の章立てで構成される。

序章

第一章 琉球方言・音韻の記述的研究

第二章 琉球方言・助詞の記述的研究

第三章 ウチナーヤマトゥグチ「カラ」の用法

第四章 係助詞「は」「も」の前に付く「ガ」の用法

第五章 格助詞に後接する「ガ」の用法

第六章 ウチナーヤマトゥグチの終助詞の用法

第七章 ウチナーヤマトゥグチの「～シヨッタ」・「～シテアル」形式について

終章

資料編

3. 論文要旨

本論文では、伝統的な琉球方言と全国共通語（以下、共通語とする）の接触によって生まれた「ウチナーヤマトゥグチ」と呼ばれることばについて、主に助詞の用法を記述し、分析・考察を行った。本論文は第一章から第七章に、序章、終章を加えた全九章から構成される。以下に、各章の内容について、その内容を要約する。

【序章】

序章では、本論文の目的と方法について述べた。また、ウチナーヤマトゥグチに関する先行研究を整理することで、本論文の枠組みを示した。

本論文の目的は、ウチナーヤマトゥグチの地域差と世代差を明らかにすることである。

ウチナーヤマトゥグチは伝統的な琉球方言と共通語の接触によって生まれたことばである。そして、伝統的な琉球方言の多様性を考えれば、それを基にして生まれたウチナーヤマトゥグチにも地域差がみられると推測できる。また、琉球方言圏の現状を考えると、世代差も現れる。地域差と世代差という観点からウチナーヤマトゥグチを分析することで、地域共通語としての役割を果たしているウチナーヤマトゥグチの実態をつかむ。

研究方法は、各地の生え抜き話者への臨地面接調査によって得られた資料を分析した。また、琉球方言圏の社会的背景を考慮した上で世代設定を行い、分析を行った。具体的には、琉球方言圏に共通語が入ってくる要因となったであろう、太平洋戦争終結（1945年）と沖縄県の本土復帰（1972年）を境目とし、1945年以前に言語形成期を迎えた世代を老年層、1945年から1972年の間に言語形成期を迎えた世代を中年層、1972年以降に言語形成期を迎えた世代を若年層と設定した。この世代設定は筆者独自のもので、琉球方言の実態を捉える新たな視点である。ウチナーヤマトゥグチの調査には先行研究を基に、筆者が作成した調査票を用いた。

さらに、ウチナーヤマトゥグチに関する先行研究について、その特徴や定義を整理したうえで、研究史における本論文の立場を整理した。ウチナーヤマトゥグチの先行研究については、国語教育の観点から「共通語の誤用」としての研究がある一方、琉球方言の「新方言」とみる研究もあり、多くの要素が「ウチナーヤマトゥグチ」という名称に含まれている。なお、本論文では、高江洲頼子(2002)（「ウチナーヤマトゥグチをめぐって」『国文学 解釈と鑑賞』67(7) pp.151-160 至文堂）の「話者は標準語を話そうと志向しているが、方言が基盤にあって、その干渉を受けてあらわれる言語現象」の定義を前提とした。

【第一章 琉球方言・音韻の記述的研究】

第一章では本論文の調査地である沖縄本島中南部方言に属する豊見城市^{うえた}上田方言と、八重山方言圏に属する石垣市方言（字登野城、大川、石垣、新川の四つの字からなる）の、音韻体系と共通語との音韻対応を記述した。また、沖縄本島若年層話者の音韻体系と共通語との音韻対応を示した。これはウチナーヤマトゥグチの音韻体系及び音韻対応を表すものである。

【第二章 琉球方言・助詞の記述的研究】

第二章では上田方言と石垣市方言の助詞用法について、特に、格助詞、副助詞、係助詞、

終助詞の具体例を挙げ、先行研究と比較しながら記述している。また、参考として、ウチナーヤマトゥグチを母語とする、筆者（沖縄本島出身の若年層）の助詞の用法も記述し、伝統的な方言との比較を行った。その結果、若年層には、終助詞に伝統的な方言と類似する語や用法がみられた。これは、終助詞や文末表現には、伝統的な方言の特徴が継承されやすいことを示すものである。

【第三章 ウチナーヤマトゥグチの助詞「カラ」の用法】

第三章では、ウチナーヤマトゥグチの助詞「カラ」の用法について、上田方言と石垣市方言の各世代での現れ方を記述した上で、分析と考察を行った。この「カラ」は共通語の格助詞「で」の〈手段・道具〉、「を」の〈動作の行われる場所〉、「に」の〈動作の到達する所〉の意味に対応して現れる。そして、「で」「を」に対応する「カラ」は上田方言 *kara*、石垣市方言 *kara* の用法が干渉した結果であるとみることができたのに対し、「に」に対応する「カラ」が独自に派生させた用法であると考えられた。

「で」に対応する「カラ」は伝統的な琉球方言と共通語の形態の重なりと意味用法の違いによって起きたと考えられた。伝統的な琉球方言には [wan ne: dʒitenʃa kara tʃan]（私は自転車で来た；上田方言）、[bana: dʒitenʃa kara ki:da]（私は自転車で来た；石垣市方言）のように、共通語「で」には *kara* という形態が対応して現れる。この *kara* の用法を共通語に置き換えようとした際、形態の重なる「から」に直訳的に置き換えたと考えられる。

また、「で」に対応する「カラ」には、〈移動の手段〉を表す際に、承ける体言を「自分が運転するかどうか」という観点に基づいた特徴的な使い分けが観察された。例えば、「車で行く」と「車カラ行く」を比較すると、「で」を用いる場合には、自ら車を運転することを表す。一方、「カラ」を用いる場合には、他人が運転する車に乗り合わせることを表すのである。伝統的な方言においては、共通語「で」に対応する語は複数現れるが、これらが「自分が運転するかどうか」という観点に基づいて使い分けられている例は観察されない。よって、この使い分けは「で」と「カラ」が住み分けを図るために生み出された、ウチナーヤマトゥグチの新たな用法である可能性が指摘できる。これは石垣市方言の中年層に顕著に観察された。

しかし、上田方言と石垣市方言の若年層では、〈移動の手段〉を表す「カラ」は使用されなくなっている。〈移動の手段〉を表す「カラ」は、ウチナーヤマトゥグチにも世代差が現

れる具体的な例であると言えるだろう。

続いて、「を」に対応する「カラ」の用法について分析した。この用法も、共通語の形態の重なりと意味用法の違いによって起きたと考えられた。伝統的な方言には、[mitʃi kara ʔattʃo:n] (道を歩いている；上田方言)、[mitsi kara du arigiru] (道を歩いている；石垣市方言) のように、共通語「を」に対応する kara がある。この kara の用法を共通語に直訳的に置き換えた結果、「を」に対応する「カラ」が生まれたと考えられた。

また、「を」と「カラ」との間には、「物理的距離」という観点に基づいた使い分けが見られた。具体的には、「道を歩いている」の場合にはその道が比較的近い距離にあることを表すのに対し、「道カラ歩いている」の場合には遠い距離にある道を指す場合に用いられる。この使い分けは上田方言と石垣市方言の中年層で確認された。「物理的距離」という観点に基づく使い分けが行われている点は、琉球方言における「ウチ・ソト意識」(内間 直仁 1990 『沖縄言語と共同体』 社会評論社) とのつながり、及びその重要性を示唆するものである。「心理的距離」を示す「ウチ・ソト意識」が、「物理的距離」という、より具体化された形で現れていると考えられる。

共通語「に」に対応する「カラ」(「上カラ着る」「下カラ着る」) は伝統的な方言との対応関係を明らかにできなかったが、ウチナーヤマトゥグチとして上田方言と石垣市方言の全ての世代に観察される。また、首都圏方言若年層話者へのアンケート調査結果と比較し、「下カラ着る」がウチナーヤマトゥグチとして特徴的であることが明らかとなった。伝統的な方言での現れ方をより詳細に分析する必要があるが、ウチナーヤマトゥグチ「カラ」が地域共通語として定着していくなかで、意味用法を広げている可能性を示唆するものである。

ウチナーヤマトゥグチの助詞「カラ」については、伝統的な琉球方言の用法を反映しているものと、新たに生み出したと考えられる用法の両方が観察された。また、上田方言と石垣市方言を比較し、世代差を通して用法を比較することによって、その特徴の一端を明らかにすることができた。

【第四章 係助詞「は」「も」の前に付く「ガ」の用法】

第四章では、共通語の係助詞「は」「も」の前に付く「ガ」を取り上げ、上田方言と石垣市方言での現れ方を比較した。そして、上田方言には観察される一方、石垣市方言には観察されないことから、ウチナーヤマトゥグチに地域差があることを明らかにした。

ウチナーヤマトゥグチでは「君ガは食べる」「これは僕ガもできる」のように、共通語には観察されない「ガは」「ガも」が観察される。この「ガは」「ガも」は伝統的な琉球方言の助詞用法に対応している。

上田方言には共通語の格助詞「が」に対応する語として、*ga* と *nu* の二つが現れ、これらは承ける体言によって使い分けられている。また、係助詞「は」には *'ja* という語が対応し、「も」には *'N* が対応して現れる。そして、これらが接続すると、「がは」に対応する *gaa, noo*、「がも」に対応する *ga'N, nu'N* が現れ、それぞれの語が姿を消さずにそのまま現れる。例えば、[?ja: ga: kamun] (君がは食べる)、[maja: no: kamun] (猫がは食べる) の *gaa, noo* は、*ga, nu* に *'ja* が接続し、音韻的に融合した結果、現れた語である。また、[kure: wa: gan nain] (これは僕がもできる)、[?in nun watain] (犬がも渡れる) のように、*ga, nu* に *'N* が接続した *ga'N, nu'N* もみられる。

一方、共通語では、「が」と「は」及び「も」が接続する場合には「がは」「がも」とはならず、それぞれ「は」「も」となるため、「がは」「がも」といった用法は見られない。よって、ウチナーヤマトゥグチ「ガは」「ガも」は伝統的な琉球方言 *gaa, nuu* 及び *ga'N, nu'N* が直訳的に置き換えられた結果であると分析できた。

また、「ガは」「ガも」の伝統的な方言での現れ方を記述することで、「ガ」が「ウチ・ソト意識」を明示するためのものであると考えられた。これまでに示した「ガは」「ガも」は、格助詞 *ga, nu* の使い分けによって「ウチ・ソト意識」が表されている上田方言（沖縄本島方言）においては観察され、その使い分けが観察されない石垣市方言（八重山方言）で現れなかった。この現象を基に、「ガ」は特定の意味を表すのではなく、〈主格〉を表す「が」を明示しようとする「ウチ・ソト意識」の働いた結果であるとみられた。琉球方言圏における「ウチ・ソト意識」の影響の強さがみられる例である。

しかし、上田方言においても、「ガは」「ガも」が老年層と中年層に使用される一方、若年層には用いられないという世代差がみられる。若年層のウチナーヤマトゥグチが、より共通語に近い姿になっていることが窺えるとともに、琉球方言圏内の共通語化という点からも興味深い。格助詞「が」に対応する語は、琉球方言圏内でも地域差が大きいため、ウチナーヤマトゥグチ「ガは」「ガも」の現れ方に関係があるかを分析することが課題である。

【第五章 格助詞に後接する「ガ」の用法】

第五章では、格助詞に後接する「ガ」の用法について分析した。

まず、石垣市方言に顕著に観察されることを明らかにした。例えば、石垣市方言話者は「海にガ近い」「君からガ始めなさい」「筆でガ書く」のように、共通語の格助詞の後に「ガ」を入れて表現することがある。そして、この「ガ」は伝統的な石垣市方言の助詞 *du* を共通語化したことで生まれたものであると考えられた。この *du* は係助詞「ぞ」に対応するとされ、文末と呼応関係を示す助詞である。続いて、伝統的な石垣市方言とウチナーヤマトゥグチを比較することで、「ガ」と *du* が対応関係にあることを示すことができた。先に挙げた「海にガ近い」は、石垣市方言では [tumorī kai du tsīkasaru] と表される。一方、「ガ」のない「海に近い」は [tumorī kai tsīkasan] と表される。同様に、「君からガ始めなさい」は [wanu kara du hadzimirja:]、「筆でガ書く」は [φudi ſi du katʃuru] となる。そのため、助詞 *du* に「ガ」が対応していると考えられた。

また、「ガ」が付くことで〈強調〉を示し、「他の物ではない」意を表わすことから、石垣市方言 *du* と意味用法においても対応することを述べた。

さらに、石垣市方言では全ての世代で使用されることから、石垣市方言のウチナーヤマトゥグチとして定着していることを明らかにした。この「ガ」の用法は、石垣市方言話者には共通語であるとする意識が強い。若年層にも継承されている点から、今後も継承されていくことが予測される。

石垣市方言では観察されるが、上田方言では観察されない現象は、前章の「ガは」「ガも」とは異なるタイプの地域差があることを示すものであり、ウチナーヤマトゥグチの多様性を示す一例であった。

ただし、伝統的な方言の助詞 *du* は沖縄本島方言にも観察されるため、*du* が「ガ」となったとするには、伝統的な方言の地域差だけでは説明ができない。また、*du* が「ガ」という語形によって現れている点も解決されていない。さらには、上田方言を含む沖縄本島方言、石垣市方言を含む八重山方言以外での方言での現れ方について調査、分析することも求められる。格助詞に後接する「ガ」には多くの課題が残っている。

【第六章 ウチナーヤマトゥグチの終助詞の用法】

第六章では、ウチナーヤマトゥグチの終助詞「サー」「ネー」「ハズ」の用法を記述した。これらの用法には世代差や地域差は観察されず、琉球方言圏全域で使用される可能性がある。

ウチナーヤマトゥグチ「サー」は〈念押し〉の意を表し、「早く持って来てサー」のよう

に用いられる。この「サー」が現れる要因は、共通語「さ」との語形の重なりが考えられる。上田方言 sa 及び石垣市方言 saa は共通語「よ」に対応する語として現れる語がある。例えば、[?ari ga katju sa] (彼が書くよ；上田方言)、[ari nu kaku sa] (彼が書くよ；石垣市方言) のように現れる。この sa , saa を「よ」の用法と捉えたことによって、ウチナーヤマトウグチ「サー」が現れたと考えられた。その一方、「サー」は共通語「さ」とは異なる用法があると同時に、「よ」に比較しても柔らかい表現となる。語を使い分けようとする話者の意識を明らかにした。この細かいニュアンスの差異は上田方言、石垣市方言の各世代に観察されたものである。

また、「ハズ」も共通語「はず」に音韻的に対応する伝統的な琉球方言 hazi を基盤とすると考えられる。この「ハズ」は「すぐ来るハズ」「雨降るハズよ」のように用いられ、共通語「だろう」に近い用法をもつが、「だろう」よりも根拠が稀薄な場合に用いられる。

「ネー」は「もう終わったネー?」「どこに行くネー?」のように〈質問〉を表す用法がある。また、「私が行きましょうネー」「私が食べましょうネー」のように、〈話し手の意志〉を表す用法も確認された。〈話し手の意志〉を表す用法は共通語「ね」には見られない用法である。しかし、この「ネー」についても伝統的な方言（上田方言 hii , 'jaa 、石垣市方言 raa , sooraa ）と音韻的に対応する語が共通語にないため、その現れ方については今後の課題であるとした。

ウチナーヤマトウグチの終助詞には世代差がみられなかったことを考えると、その姿を保ちやすいという特徴があると考えられた。上田方言及び石垣市方言の若年層にも、「サー」「ネー」「ハズ」は観察されることを踏まえると、終助詞を含めた文末表現には伝統的な方言が残りやすいことが推測される。今後、これらの用法がどのように変化していくのか、注視する必要がある。

【第七章 ウチナーヤマトウグチの「～シヨッタ」・「～シテアル」形式について】

第七章では、ウチナーヤマトウグチの「～シテアル」・「～シヨッタ」形式について分析した。これらの形式も、上田方言と石垣市方言の全ての世代に観察される。以下に、それぞれの具体例を示す。

① 「～シテアル」形式の具体例

ご飯を食べテアル 〈結果継続〉・〈痕跡に基づく推定〉

木が枯れテアル 〈結果継続〉・〈痕跡に基づく推定〉

《伝統的な方言との対応》

・上田方言

[munu kare:N] ご飯を食べてある ([munu karo:N] ご飯を食べている)

[ki: nu karite:N] 木が枯れてある ([ki: nu karito:N] 木が枯れている)

・石垣市方言

[mbon ho:je:N] ご飯を食べてある ([mbon ho:ri:N] ご飯を食べている)

[ki: nu karje:N] 木が枯れてある ([ki: nu kari:N] 木が枯れている)

② 「～シヨッタ」形式の具体例

筆で書きヨッタ 〈直接的エヴィデンシャリティー〉・〈目撃〉

隣の家から聞こえヨッタ 〈直接的エヴィデンシャリティー〉・〈聴覚〉

《伝統的な方言との対応》

・上田方言

[φudi ji katʃutan] 筆で書きヨッタ ([φudi ji katʃan] 筆で書いた)

[tunai nu ja: kara tʃikari:tan] 隣の家から聞こえヨッタ

([tunai nu ja: kara tʃikattan] 隣の家から聞こえた)

・石垣市方言

[uja tu ma:dun hatta] 親と一緒にいきヨッタ ([asabi na haruda] 遊びに行った)

「～シテアル」形式は共通語と同様、〈結果継続〉を示す用法をもつが、〈間接的エヴィデンシャリティー〉を表す用法も観察された。具体的には、〈痕跡に基づく推定〉を表す用法である。この用法も伝統的な方言からの干渉によるものである。また、共通語では「～してある」が付かない動詞にも付くことができる例が観察された。

対して、「～シヨッタ」形式は〈直接的エヴィデンシャリティー〉を表し、〈知覚〉したことを示す際に用いられる。また、若年層には〈意外性〉というミラティブな意味を表す用法も観察された。ウチナーヤマトウグチの世代差が現れている例となっている。

これらの形式は、伝統的な琉球方言の用法を共通語に置き換えたことによって現れたも

ので、ウチナーヤマトゥグチとしての特徴を有している。また、若年層では、老年層や中年層に比較して、接続できる動詞が多くなる。ウチナーヤマトゥグチが継承されていくなかで、その用法を広げていることが明らかとなった。上田方言と石垣市方言のどちらにも観察され、かつ世代差を明らかにできたことは本論文の成果の一つであるとした。

最後に、これまでの分析・考察をまとめるとともに、課題として、伝統的な方言との対応関係を含めた詳細な分析を挙げている。また、本論文では取り上げなかった「～シヨル」形式の現れ方についても取り上げ、ウチナーヤマトゥグチの体系にも変化が起きている可能性を指摘した。琉球方言圏の各地の実態を明らかにすることも大きな課題であるとしている。

【終章】

終章では、ここまで取り上げたウチナーヤマトゥグチの用法について、世代差や地域差を中心に再度まとめている。そして、それぞれの用法について、今後の課題を挙げている。琉球方言圏内に使用されるウチナーヤマトゥグチは一律ではないことを述べ、琉球方言圏各地での調査や実態報告が必要となる点を指摘した。ウチナーヤマトゥグチ研究の発展は今後の琉球方言を考える上で重要であることを述べ、琉球方言圏の多くの地域の資料が求められることを述べた。

また、ウチナーヤマトゥグチ研究はピジンやクレオールなどの接触言語研究にも貢献できるとともに、世界各国の沖縄系移民のコミュニティーで話されることばとの比較研究も求められることを挙げる。ウチナーヤマトゥグチは、伝統的な琉球方言と共通語の接触によって生まれたことばが、共通語でも伝統的な琉球方言でもない、新しい方言体系を生みつつあることを表わす。そして、世代差や地域差がみられることに関連して、ウチナーヤマトゥグチにも、特徴を保ちやすい面と共通語の体系を受け入れる面があることを示唆する。その中で、日常生活で意識されることの少ない助詞などは、形態や用法も類似していることから、共通語として認識され、継承されているのだろうと考えられた。

最後に、琉球方言圏での言語生活研究の重要性の述べるとともに、ウチナーヤマトゥグチが今後の琉球方言話者としてのアイデンティティを担う可能性を挙げることで、より広範囲にわたる詳細な研究が必要となるとした。

【資料編】

資料編には調査で得られた資料を IPA 表記によって記述した資料を載せている。具体的には、上田方言及び石垣市方言の老年層話者の伝統的な方言の資料である。